View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

〈講　演〉

21世紀のナポレオン

高村　忠成

今回、私は、21世紀のナポレオンというテーマで話をさせていただきます。「21世紀のナポレオン」というのはナポレオンの弟ジェローム公の第５代目の子孫、シャルル・ナポレオン公、この人を指します。シャルル・ナポレオン公と池田先生が2006年５月３日、東京牧口記念会館で対談をいたしました。この時のエピソード等を紹介しながら、「21世紀のナポレオン」と言われるシャルル・ナポレオン公と池田先生がナポレオンをめぐっての語らいのなかで、どういうことが話題になったのか、お話させていただきたいと思います。

さてナポレオンとの関わりでありますけれども、私も大変に申し訳ないことかもしれませんけれども、1996年に池田先生と二人のフランス人を相手に、合計４人でナポレオンの語らいを行わせていただきました。その模様が『波乱万丈のナポレオン』（潮出版社）という本になっておりますけれども、あの１年間、池田先生と様々に語り合ったナポレオンの思い出、これは今でも私の脳裏に焼き付いて離れません。その当時のことは私ははっきりと覚えております。

それは1995年の２月25日のことでした。朝、私が大学の研究室で仕事をしておりましたら突然電話がかかってまいりました。それは池田先生の秘書の方からでした。「高村先生、今日、夕方お時間があるでしょうか。創立者の池田先生が是非お会いしたいと言っております」、こういう電話でした。私は「夕方、時間があります。空いております。お待ちしております」と言って電話を切ったわけであります。まあ、その日は一日は仕事になりませんでした。何のことかなあ、あの問題かな、この問題かな、このことかな。数々の私の悪行の思いが脳裏を横切りました。一体どういう問題なのだろう。創立者が会いたい。池田先生が会いたい……。一体何だろうか。そのことばっかりでその日は一日仕事になりません。

そして夕方、富士美術館に行きました。そして富士美術館で池田先生とお会いしたわけであります。その時に池田先生が真っ向から切り出されたことは「実はナポレオンの対談をやろうと思うんだ。君はフランスの政治が専門だったね。フランスの政治が専門だからナポレオンのことを語れるだろう。日本人はナポ

レオンが好きだからね」。「フランス人も入れてやろう。一人はナポレオンが好きだという人。もう一人はナポレオンが嫌いだという人。この２人のフランス人を入れて合計４人で来年から１年間、ナポレオンの語らいをやろうではないか」。こういう話だったわけであります。

そしてその時、池田先生はいろいろな話をしてくださいました。「私もナポレオンが大好きなんだ」「戸田先生も小学校の高等科、ナポレオンの話をよくされて、『ナポレオン』『ナポレオン』と友だちから言われていたんだ」「私も夏季講座などで中学生等を相手にナポレオンの話をよくしたものだ。そうしたことから『ナポレオン博士』と言われた」。そしてまた「私が妻と会ってから後もお互いに本を貸したり借りたりして読みあった。そのなかにナポレオンの伝記が入っていたんだ。すなわちナポレオンは私たち夫婦の縁結びの役割も果たしていたんだよ」。こういうお話を先生はしてくださいました。

そして1996年の夏、東京で、また長野県の軽井沢で、対談の相手がフランス人ですからしょっちゅう来るわけにはいきませんので、年に２、３回フランスから二人のフランス人が来まして、様々にナポレオンの語らいをしました。その結果が『波乱万丈のナポレオン』という本になったわけであります。

先生はそれに引き続いてシャルル・ナポレオン公というナポレオンの直系の子孫と東京牧口記念会館で対談され、そして『21世紀のナポレオン』（第三文明社）という本を著されたわけであります。ちょうどそのシャルル・ナポレオン公と池田先生との語らいがどういうものであったか、その一端を示すエピソードもご紹介したいと思います。

創立者池田先生とのナポレオンの語らいを通して、「21世紀の今、一体ナポレオンを語る意味はどこにあるのか」「ナポレオンはどういう存在なのか」、そういう話をさせていただきたいと思います。

「歴史上の人物で誰が一番好きか」、という統計が日本でもフランスでもとられておりますけれども、日本でもフランスでも不思議なことに、日本ではナポレオンは第２位でありました。フランスでもナポレオンは第２位。フランスの場合はド・ゴール大統領が第１位でナポレオンは第２位。歴史的に非常に影響を与えた人物としてその名を残しているわけであります。

そしてまた世界で今までいろいろな本が出ております。特に人物を扱った本がたくさん出ておりますけれども、誰を、どの人物を扱った本が一番多いかといいますと、第１位はキリストであります。キリストのことを扱った本が世界で一番多く出回っている。またキリスト並びにキリスト教関係の本が一番世界

で、出回っているわけであります。

そして第２位が、なんとナポレオンなんです。ナポレオンの本は、だいたい、正確にナポレオンそのものを扱ったものからナポレオンの周辺の部分を扱ったものまで入れるとだいたい40万冊といわれております。「ナポレオンの本を全て読んだ人はいない」と言われるほどナポレオンの評価、人気というものは大変に高いのであります。

こうした高い評価、人気を博しているナポレオンではありますけれども、それに先ほど言いましたが、池田先生は若い頃「ナポレオン博士」と言われ、戸田先生もまた「ナポレオン」と言われていた。一体この二人の歴代の創価学会の会長はなぜナポレオンに魅かれるのか、なぜナポレオンに憧れるのか、それを考えてみたいと思います。

後でご紹介します『21世紀のナポレオン』のなかに書かれているわけでありますけれども、まず池田先生は第一番目に「ナポレオンは戦い続ける生命がナポレオンであった」といわれます。「ナポレオン」という名前は「谷間の獅子」ということであります。「ナポ」は「谷間」、「レオン」は「獅子」。ナポレオン、谷間の獅子、そういう名前だそうであります。このナポレオンは「前進」「前進」という言葉を合言葉に新しい時代の創造を目指して、「前進」「前進」の行動を貫いた壮大な生命力がある。常に「前進」ということを忘れなかった。「そこに私は第一番目に魅かれるんです」、そういうふうに先生は言われました。

そしてまたナポレオンは、後ほどまた詳しくお話しいたしますが、「一人の人間には無限の可能性がある」ということを信じていた。ナポレオンは子どもの頃から「秀才である」とか「逸材である」とか、そういうことは全くありませんでした。辺境コルシカ島の貧乏貴族の息子として生まれたナポレオンは、身体も小さくいじめられっ子で、本当にいったいどこに、後ほどお話しするような偉業を成し遂げる力があったのかというような、そういう全く目立たない平凡な一少年でした。そのナポレオンが歴史を変えるような大偉業を成し遂げていったわけであります。すなわち池田先生は、一人の人間には、どんな人にも偉大な可能性があるのだ、これを確信していくことが大事なんだよ、ナポレオンはそのことを物語っているんだ、と言われております。

そして三番目に「ナポレオンは数々の苦境、逆境にあっても変わらない」「不動であり屹立していた」「我は我なり」というようにナポレオンは全く変わることがない。すなわち「自分自身に負けることが決してなかった」「自分自身に負けない」「自分自身に生き抜く強さ」。自分の信念のままに進んでいった」。

ここにナポレオンの偉大な生き方があるんだと。マキャベリも言っているではないか。「偉大な人間はどんな環境に置かれでも常に変わらない」と。これは池田先生が戸田先生に魅かれた理由でもあったんです。

ある懇談会の席上、ある人が池田先生に「戸田先生はどんな人柄の人でしたか」というふうに尋ねられました。池田先生は次のように答えられました。

「豪放磊落な、それはそれは人間的な魅力に富んだ先生でした。生きるか死ぬかという瀬戸際の時でも、常に堂々としていました。しかも豪放磊落の中にも細やかな気配りを忘れることのない人柄でした。会員には限りない慈愛をもって接していました。会員の抱える苦悩に人知れず涙を流されることもありました」。こう池田先生は戸田先生のことを語られます。

すなわち戸田先生は生きるか死ぬかという瀬戸際の時でも常に堂々としていた。そしてまた細やかな気配りを忘れず、会員には限りない慈愛をもって接する。会員の苦悩には人知れず涙を流す。こういう戸田先生の堂々たる姿勢、これに池田先生は大変に魅かれたというようにお話しされております。

またこのナポレオンの姿勢は文豪ゲーテとの語らいのなかでも如実に物語っておられます。すなわち、文豪ゲーテはナポレオンと２回会います。ナポレオンが39歳、ゲーテが59歳の時でありました。このナポレオンとゲーテはその語らいのなかで、ナポレオンはゲーテの『若きヴェルテルの悩み』、これを引用するなど、ゲーテに尊敬の念を抱いていたわけです。そして初の会見で大文豪の円熟した人格と威容を目の当たりにしてナポレオンは思わず感嘆の声をあげたと言われております。すなわち、「あなたこそ人間です」、こう言ってナポレオンはゲーテを讃えるのです。

そしてナポレオンとゲーテの語らいは続きます。イギリスの文豪シェークスピアをめぐって、ナポレオンはシェークスピアを厳しく批判いたしますけれどもゲーテはシェークスピアを擁護いたします。しかしそのゲーテもナポレオンとの出会いに触発されて、有名な『ファウスト』という本の第５章を全面的に書き改めたと言われているのです。

そしてゲーテはナポレオンと会った後、ナポレオンの偉大さについて次のように語っております。すなわち、「ナポレオンは常に同じ人間であった。戦闘の前にあっても、戦闘の最中であっても、勝利の後であっても、敗北の後だろうと、彼は常に断固としてたじろがず、常に何をなすべきかをはっきりと弁えていた」。このようにゲーテはナポレオンを非常に高く評価するわけであります。それは「いつも同じ人間であった」「いつも変わらぬ人間であった」とい

うところに、ゲーテはナポレオンに魅かれたのであります。

このように池田先生がナポレオンに魅かれた第三番目の理由は、数々の逆風にあっても変わらない、不動である、屹立していた、そこに先生はナポレオンに魅かれたというように言われているのです。「身、不動揺なり」。富士の如く、滝のように恐れず、堂々たるナポレオンの人生、生き方、これが大事だというように先生は言われているのです。

第四番目に、「ナポレオンは人々に夢を与える指導者であった」こと。「人々に希望を与える」「夢と勇気を鼓舞する革命家であった」というように先生は言われております。「人間として大事なことは、人にどれだけの夢を与えられるか、人にどれだけの希望を与えられるか、これが大事なんだ」と。ナポレオンはこのように多くの兵士、また多くの民衆に夢や希望を与える指導者であった。

そして第五番目に、先生はナポレオンのその「比類なき行動力」、それを高く評価しております。まさにナポレオンは「行動の人」であった。比類なき行動の人であった。これがナポレオンの非常に凄いところである。このように先生は言われております。

池田先生がなぜナポレオンに魅かれるのか。以上の五点、これが池田先生がナポレオンに魅かれる理由であります。

ところが皆さん方、ナポレオンというと「軍人じゃないの」「戦争をやった人じゃないの」、というようなイメージを咄嗟に持たれるかもしれません。しかし偉大な思想家、偉大な思想、というのはプリズムのようなものでありまして、異なった光を当てると異なった光を発するというように言われております。ナポレオンが軍人であったことは紛れもない事実であります。しかしナポレオンは軍人である以上にいわゆる文化人であった。政治家であった。行政マンであった。ナポレオンという人は実に軍人であるというだけでは捉えられない非常に多角的な側面を持っている人であったのです。

ナポレオンは、まず何よりも、子どもの頃は小説家を目指します。そして自分でも文章を書いたり、あるいは論文を書いたり、詩を発表したりしております。「クリッソンとユゼーニイ」というタイトルの短い恋愛小説も書いている。ナポレオンは何よりもまず文筆家として生きようとしたわけです。またナポレオンは、「軍人ナポレオン」、「将軍ナポレオン」というように名乗るよりも、「フランス学士院会員」という名称を非常に評価していた。自慢していた。ナポレオンは数学・物理部門のフランス学士院会員という肩書きをもっていたのです。

そしてナポレオンは戦争に行くときも常に、単に戦争をしに行くという武力

で相手を打ち負かすというだけではなくて、その国の実情、その国の地理、その国の風土、そういうあらゆるものを研究する。こういう、いわゆる研究家として側面も持っていたわけであります。

ナポレオンはエジプト進出を企てました。その時ナポレオンはエジプトに到着するやいなや早速エジプト学士院というものを創設するのです。これは数学、物理、経済、文芸という４部門からなる学術団体です。そしてナポレオンはそこで様々な研究テーマを提案いたします。

すなわち「ナイル川の水を浄化できるか」「エジプトに風車を建設できるか」「エジプトに火薬の原材料はあるか」「エジプトの法律教育に改善の余地はないか」「木綿、コーヒー豆、サトウキビ等々の種々の植物栽培を中心とした植物園を作れるか」、また「宗教施設を通して診療所を開くことはできるか」。ナポレオンはそういう様々なテーマを与えます。そしてまたナイル川の沖積層の開発の可能性を探ったり、当時エジプトで猛威を振るっていたペスト、この研究を命じたり、またエジプトの人口の半分を盲目にしたと言われているトラコーマの原因の解明について命じたりと、あらゆる研究をしてその成果を『エジプト誌』という雑誌にまとめ発刊いたしました。

今日でもこの『エジプト誌』というナポレオンの研究成果は古代エジプト研究の基礎資料とされているのであります。

またその他にも、砂漠の砂の組成する方法は何か、ナイル川の河口の三角州の植物はどうなっているか、紅海の鉱物はどうか、ナイル川の魚の生息状況はどうか、こういうような調査をしているのです。そしてあの有名なロゼッタ・ストーンという石をナポレオン軍の兵士が発見する。このロゼッタ・ストーンという石に刻まれたヒエログリフ（神聖文字）という文字が解明されて、古代エジプトの状況がよくわかるようになったといわれているのです。

そしてナポレオンがとりわけ関心をもったのが地中海の航路を結ぶ運河の建設であります。自ら、古代の運河の建設に徹底的に調査をいたしまして、その時に彼は様々なメモを残します。このナポレオンの残したメモをもとにレセップスという人が1869年にスエズ運河の開設に成功する。それまで東洋と西洋を結ぶのにずっと遠く大西洋、インド洋を渡って東洋にいかなければならなかったのが、このスエズ運河の開設によって地中海から東洋に行けるようになったという画期的な方法が発見されたのです。

そしてナポレオンはピラミッドにも興味を示しました。この三大ピラミッドの石を使って高さ３メートル幅１メートルの壁を作ればフランス全土を囲むこ

とができるのではないかと、ナポレオンは考えるわけです。エジプト学士院の議長であった数学者のモンジュは計算し、そのナポレオンの推定がまったく正しいことを証明するのです。この三大ピラミッドの石を使って高さ３メートル幅１メートルの壁を作れば、万里の長城のようにフランス全土を護る壁ができるのではないかと、ナポレオンは考えたのです。

こういうナポレオンのエジプト遠征のときの、単なる軍事的な侵略ではない、軍事的な侵略以上に、エジプトの様々な状況を克明に調査するというナポレオンの「文人」としての、「文化人」としての、「学者」としての関心が非常に強く残っていたのです。

と言いますのはナポレオンは、後ほどご紹介いたしますが、ブリエンヌの陸軍幼年学校、あるいは陸軍士官学校に進みますけれども、この若き日のナポレオンは読書に没頭するわけであります。ヨーロッパをはじめインドやエジプト、アメリカ、ロシア、アフリカなど世界諸国の歴史や地理の本を読みまくる。そしてまたプラトン、ルソー、マキァヴェリなどの名著を読む。そしてペルシャ、アテネ、スパルタなど古代国家の法律を研究する。さらに砲術や城を攻める方法などの軍事書を読みまくり、そして天文学、地質学、気象学、財政論、人口論、死亡統計書などの学術書と、このように徹底的に研究しつくすわけであります。ナポレオンのその膨大な研究力、いわゆる勉強量というのは、相当なものであったといわれております。

そうした彼が座右の書としていたのは『プルターク英雄伝』、またジュリアス・シーザーの『ガリア戦記』であります。これらの本をナポレオンは座右の書として好んで読んでいたといわれております。そして彼はアレキサンダー大王よりもジュリアス・シーザーの方を深く敬愛していたといわれております。その理由はですね、アレキサンダーは大戦闘家であり、大政治家であり、大立法者であったが、成功の絶頂にあって心が傲ってしまった。そういう欠点がありました。それに対してシーザーは青春時代は乱れていたけれども、しかし最高で、活発で高貴な精神を最後は輝かせていた。そういう点においてナポレオンは、「どんな生涯においても、栄光はその最後にしかない」という点から、ジュリアス・シーザーを大変に高く評価していたのです。

そしてナポレオンは数々の戦闘を行いましたけれども、しかしナポレオンの戦闘のなかで、ナポレオンが常々言っていたことは、「世界には二つの力しかない。『剣』と『精神』の力である。そして最後は必ず『精神』が『剣』に打ち勝つ」、これがナポレオンの信条でありました。このナポレオンの精神を非

常に深く受け継いだのが、あのイギリスから独立したインドのガンジーでありました。インドのガンジーは、剣に呪われた人類史の暗黒を打ち破って、最後はナポレオンが夢見た「『精神』が『剣』に打ち勝つ世界」、これを必ず実現するんだと、このようにみていたのです。すなわち、ナポレオンがガンジーに与えた影響は非常に大きかった。そう言わざるを得ないのです。

以上、様々な観点からお話ししてまいりましたけれども、このようにナポレオンというと「軍人」というイメージがありますけれども、しかしそれはあくまでも一つの側面でしかなく、ナポレオンは実は「軍人」であるよりも「文化人」であった、こういう面が非常に強かったのです。

そして『21世紀のナポレオン』という池田先生とシャルル・ナポレオン公とのこの語らいも、いわゆる「軍人」としてのナポレオンを扱っているわけではない。軍人としてのナポレオンを扱っているのではなくて、ナポレオンというと「文化人」であって、「文化人としてのナポレオン」という観点から様々に論じ合ってみたいと、言われているのです。

私も幸いにしてこの池田先生とシャルル・ナポレオン公との対談の場に同席させていただきましたけれども、その席上、次のようなやりとりがありました。

主として池田先生がシャルル・ナポレオン公に質問をするという形で対談は進められていきました。池田先生はシャルル・ナポレオン公に関われました。「ナポレオン家の当主として後世に伝えていきたいナポレオンの精神とはいったい何でしょうか」、というように先生は尋ねられました。ナポレオン家の当主として後世に伝えていきたいナポレオンの精神とはいったい何でしょうか。

シャルル・ナポレオン公は答えられました。「それは『エスプリ』（精神）です」と。「1789年の精神です」。すなわち「フランス革命の精神です」と。「『自由』『平等』『友愛』『人権』」というこのフランス革命の精神を伝えていきたい。これはいまだに消えることのない、いまだに色褪せることのない重要な人類の指針です。その1789年の精神を後世に伝えていきたい。こう思います」というようにシャルル・ナポレオン公は答えておられました。

そして先生は、「レジオン・ドヌール勲章、フランスの最高の勲章と言われているレジオン・ドヌール勲章をなぜ定められたのですか」、こう尋かれました。それに対してシャルル・ナポレオン公は「それは陰の功労者、最前線の兵士に贈ったものです」と。「全国民に聞かれたものとして、全国民を讃えるものとして、レジオン・ドヌール勲章をナポレオンは定めたんです」。こういうように言っておりました。

「ナポレオンが残した言葉で好きな言葉は何でしょうか」、というように先生は三番目に尋ねられました。それに対してシャルル・ナポレオン公は「それは『共和』です」と。これは政治形態としての「共和」ではなく、「人と人とのつながり」という意味での「共和」。

「この言葉をナポレオンは大変に好んでおりました」と。

そして池田先生はさらに「これからの青年に学んでほしいナポレオンの人生哲学、信念、理想は何でしょうか」、こういうように尋ねました。それに対してシャルル・ナポレオン公は次のように答えておりました。それは「ナポレオンが築いた業績、歴史は今も生きております。この生きているナポレオンの業績をこれからどのように守っていくか。どのように発展させていくか。それを学んでいっていただきたいと思います」。こういうように言っておりました。

ナポレオンが築いた業績、歴史というのは今も生きている。この生きているナポレオンの業績や歴史をこれからどうやって守っていくのか。どうやって発展させていくのか。そういうことを学んでほしいということをシャルル・ナポレオン公は言っておりました。

さらに池田先生は、「ナポレオンは、精神の力が最後は剣に勝つ、と言いましたけれども、この精神の力が勝利するにはどうすれば良いでしょうか」。このように尋ねたわけであります。それに対してシャルル・ナポレオン公は「それは文化です。文化の共有です。文化を共有することで精神が最後には剣に勝っていく」。そしてまた二番目に「各国のエゴイズムを乗り越えることです。世界市民になることです。そうすることによって精神の力が勝利することは間違いありません」。このように述べておりました。

そして池田先生は次に「ナポレオン家の家族の歴史として、ナポレオンが好んだ言葉は何でしょうか。さきほど『共和』という言葉を伺いましたけれども、それ以外に何かあるでしょうか」、というように池田先生は尋ねられました。それに対してシャルル・ナポレオン公は「それは『前進』です」と。「ナポレオンが好きだった言葉は、『前進』『前進』という言葉でした。それは自分のためだけではなくて、人々のために働く人生。そのための前進。そのことをナポレオンは非常に好んでおりました」。このように言っておりました。

以上、この『21世紀のナポレオン』の本のなかに著されておられますけれども、池田先生とシャルル・ナポレオン公との対談がこのような形で行われたわけであります。

さて大分、いきなりナポレオンの中身に入ってしまった話が多かったわけで

ありますけれども、ここでもう一度、歴史に則って、一体ナポレオンとは何だったのか、どういう人生を歩んだのか、このことを考えてみたいと思うのです。

ナポレオンのことを理解するためには次の三つのことを理解しなければなりません。一つは、フランスの絶対王政とは何か。絶対王政の時代はどういう時代だったのか。またその絶対王政を倒したフランス革命とは何だったのか。そしてナポレオンはフランス革命とどういう関係にあるのか。このように「絶対王政」そして「フランス革命」、「ナポレオン」というこの３つのキーワードをしっかりと理解しておかないとナポレオンの本当の偉大さというのがわからないと思います。

まず「絶対王政」であります。これは国王を中心とした厳格な身分制社会であります。国王が社会の頂点にいてその下に僧侶がいてその下に貴族がいてその下にブルジョワジー、農民、労働者がいる、そういう構造になっておりました。国王がいて僧侶がいて貴族がいてそしてブルジョワジー、労働者、農民というこうした厳格な身分制社会でがんじがらめにされていたのが絶対王政といわれる時代でありました。そしてこの絶対王政はキリスト教と非常に密接に結びついておりまして、「王権神授説」という、国王の権力は神から授けられたものであって国王に従うことが神の救済を得られることなのだ、という非常に物理的にも精神的にも国王にがっちりと縛りつけられていたということが絶対王政の時代といわれているのであります。

「フランス革命」はそうした厳格な身分制、そしてまた国王に従うことが神に従うことであり、神の救済を得られることである、というような考え方に真っ向から異を唱えたのが「フランス革命」でありました。「そんなことはない」「人間というのは自由であり、平等であり、そして友愛の精神をもち、さらには全ての人には人権がある」。そう言って、「人間はすべて平等である」、「人間はすべて自由である」ということを説いたのがフランス革命であった。そして特に教会と密接に結びついている国王権力を打倒し、カトリックを徹底的に否定いたしました。教会、カトリック、そして国王に従うことにより神の救済を得られる、そんなことはあり得ないのだと、非常に強く否定したのはフランス革命であります。

ところがフランス革命は絶対王政を否定いたしましたけれども、逆に絶対王政を否定したことにより混乱を招くことになってしまった。すなわち、「自由」「平等」「友愛」の精神を掲げたけれども革命勢力のブルジョワジー、また貴族、これらの間に溝ができる。ブルジョワジー、これはむしろ「自由」ということ

に憧れていた。それに対して農民とか労働者は「平等」を重視していた。この「自由」と「平等」というのは、我々はすぐ「自由・平等」というふうに続けて言ってしまいますけれども、よくよく考えてみますと「自由」と「平等」というのは相反する原理なわけです。「自由」を強調すると、どうしても不平等が生じてしまう。逆に「平等」というものを強調すると今度は「自由」が制約されてしまう。すなわち「自由」と「平等」というのは非常に理想的な状態ではあるのですけれどもこの二つの原理はなかなか並立しない。そこで「友愛」あるいは「連帯」という概念が出てくるわけであります。本当にお互いに尊敬し合い、尊重し合える、そして連帯し合えないと、「自由」と「平等」というのは成立しないという形になってしまうわけですね。

フランス革命は王政を倒したことはいいけれども、その後、多くの貴族が国を去ってしまうわけです。これを「亡命貴族」といいます。フランスを捨ててしまうわけです。フランスを捨てて他国へ逃げてしまう。また革命勢力の間で、さきほど言いましたように、「自由」と「平等」という原理の対立をめぐって革命勢力同士が戦い、お互いに対立を生じてしまうという結果になってしまったんです。

これはよくありますね。今でもイラクとか、今問題になっているシリアとか。いわゆる今の権力が悪いからといって、今の権力を倒したからといって、すぐにすんなりと理想的な権力の状態が生まれるかというと決してそんなことはない。かえって混乱が起こるんです。既得権益にしがみつく勢力と新しい時代を要求する勢力との戦いが非常に激しくなるに従い、かえって革命前は安定していたのに革命後のほうが混乱をしてしまうという状況が生まれてしまう。これはフランス革命も全く同じ状況でありまして、「自由」「平等」「友愛」「人権」を機軸として革命を起こしたことは良かったんですが、しかし当時の時点でいうと革命後、混乱、無秩序、破壊、侵略、そういうものがずっと続きまして、下手をすると、もうフランス革命は失敗だなという状況に陥ってしまうわけであります。

そのフランス革命がもう失敗だという状況のなかに、後ほどお話しいたしますが、ナポレオンが登場してきて革命を立て直して、そしてフランスの社会を新しく生まれ変わらせていく、こういう状況になっていくのです。

したがってフランス革命とナポレオンというのは一体不二のものなんです。もしフランス革命がなければ、ナポレオンは国王軍の一将校として平凡な人生を終わってしまったかもしれない。フランス革命がなければナポレオンという

人の台頭はなかったかもしれない。しかし今後は逆に、ナポレオンがいなかったらフランス革命は失敗に終わっていたかもしれないというように、フランス革命とナポレオンは一体不二のものとして存在していたということが言えると思います。

そうした状況がフランス革命にはあったんですが、それではナポレオンの時代をみてみたいと思います。ナポレオンはどういう時代を生きたのか。まず1769年の８月15日コルシカ島に生まれます。このコルシカ島というのはですね、ナポレオンが生まれる前年、すなわち1768年、ナポレオンが生まれる１年前にコルシカ島はイタリアからフランスになったという経緯があります。したがって法的には、あるいは政治的・法的に言いますとナポレオンはフランス人でありますけれども、しかし民族的、また歴史的に言いますと、今日フランス領になったからといって今までイタリア人であった人がいきなりフランス人になるなんてことはありえないわけです。したがってナポレオンという人は、厳格に言うとフランス人というよりもむしろイタリア人であるといえます。ジェノバ共和国のコルシカ島、イタリア人というとこれまた嫌うんですけれども、コルシカ人であった。コルシカという独特の風土、民度をもった国の人であったと言えると思います。

そしてナポレオンはフランス領に入って、ブリエンヌの王立幼年学校に入ります。これは陸軍の幼年学校ですけれども、軍の学校といいますのは当時最高の教育を受けられるところでありまして、単に軍事教練、軍事鍛錬だけをしていたわけではない。さまざまな学問を学ぶ、そういうところでもあったわけです。ナポレオンはそのブリエンヌの王立幼年学校からパリの陸軍士官学校に進み、そして軍人として砲兵連隊に入隊し各地を転々とするのです。

そうするなかで1789年の７月14日にフランス革命が勃発いたしました。本来、軍人というのは国王の軍隊なんですけれども、このころすでに軍は割れておりまして、国王に就く軍隊と革命軍に就く軍隊とに分かれておりました。ナポレオンは革命軍についた。そして革命軍の軍人として活躍するのです。

そしてフランス革命が進行し、革命軍と革命政府の軍人としてナポレオンはやがてイタリア遠征を命ぜられ、その間に1796年３月９日にジョゼフィーヌと結婚いたします。そしてイタリアから帰ってくるんですけれども、さきほど言いましたように、革命を起こしたのはいいけれども革命政府はあまりにも不甲斐ない。お互いに対立、抗争を繰り返す。また何も新しい手を打つことができない。そういうものに業を煮やしたナポレオンは1799年11月９日、すなわち30

歳の時に「ブリュメール18日のクーデタ」を起しまして、第一執政に就任するのです。

第一執政といいますのは、今日で言うと大統領になります。ナポレオンは30歳にしてフランスの大統領に就任する。もう軍人たち、政治家たちには任せておけない。自分が政権をとって政治を行うんだ。こう言ってナポレオンはたちあがるわけです。そしてクーデタを起こして第一執政、すなわち大統領に就任する。そして大統領職をずっとやってきて1804年の12月２日に、もう二度と王政には戻さないという決意も込めて、フランス皇帝に就任するのです。

フランス皇帝に就任してからも、ヨーロッパの統一を目指したり、様々な戦争を行ったり、あるいは国内の行政上の施策を次々と断行いたしまして、フランスとやがてヨーロッパ全土をほぼ傘下に治めてヨーロッパの統一をほぼ成し遂げるのです。

ところが言うことを聞かないロシアに制裁を加えるために1812年６月にロシア遠征を企てまして、このロシア遠征が大きな躓きとなって、翌年1813年10月にライプチヒの戦いにおいて、プロシア軍などを相手に戦って敗北をいたします。そして1814年４月11日に皇帝を退位いたしまして地中海のエルバ島に一旦流刑されます。

ところがナポレオンが退位した後、王政が再び復活するわけでありますけれども、その国王ルイ18世の政策が非常に良くない。ナポレオンを恋焦がれる声が非常に高くなっていく。またナポレオンによって統一されたヨーロッパを立て直すために、ウィーン会議というのが開かれますけれども、それもなかなかうまくいかない。そういう国内外のうまくいっていない状況を察知してナポレオンは再びエルバ島を脱出いたしまして1815年３月に皇帝に復位いたします。

皇帝に復位いたしまして、ワーテルローの戦いに臨みます。イギリスと戦うわけです。イギリス・プロシアの連合軍と戦いますけれども結局このワーテルローの戦いに敗れて、大西洋の絶海の孤島であるセント・ヘレナ島に流されます。そしてセント・ヘレナ島で約６年間の生活を送って1821年５月５日にセント・ヘレナ島で死去いたします。享年51歳でありました。

このようにナポレオンの一生といいますのはまずコルシカ島で生まれてセント・ヘレナ島で亡くなるというように、非常に島と関係が多い。８月15日の終戦記念日に生まれて５月５日の子どもの日に死ぬ。非常に覚えやすい生涯であったと思うわけです。この51年の生涯の間にナポレオンは様々なことを行ないます。これからナポレオンが一体どういうようなことを行ったかということ

を見ていきたいと思います。

「人民主権」という言葉があります。これは非常に大きな問題であるわけですけれども、これからの時代は国王の時代ではない。これからは人民が主権を握る時代である。この人民が主権を握るというのは一体どういうことかと言うと、「人民のために何を為すことができるか」、「人民のために何を為すか」ということ、これが非常に重要になる。「人民の利益のために為す」というのがナポレオンの非常に大きな課題であった。これからナポレオンが行ったことを見ていきますけれども、それを見ていきますといかにナポレオンが単なる軍人ではなかったということがよくわかると思います。

すなわち第一番目にナポレオンが行ったことは、「社会的融和と再構成」を図ったことであります。フランス革命は社会の亀裂を招いてしまいました。本来、王政を倒し身分制を否定するという偉業を成し遂げたわけでありますけれども、しかし実際は社会に亀裂を招いてしまって革命政府の間に分裂をもたらしてしまったということがあります。

ブルジョア階級や市民たちは「自由」を求め、農民や労働者は「平等」ということを求める。一方、亡命貴族に対してはもうフランスにもどっていらっしゃいと、もうこれ以上貴族を弾圧することはないからフランスに戻っていらっしゃいということをナポレオンは言う。ただし、亡命貴族から取り上げた土地は貴族には再び戻さない。農民に与えた物は農民の物とするというふうにするわけであります。このようにナポレオンはまずフランス革命の、いわゆる貴族、僧侶、そしてブルジョア階級、こういう人たちの利害の調整を図り、なおかつ革命によってややもすると分裂しそうなブルジョアジーや農民との間の関係の調整を図っていくわけであります。

そして人材の登用においても能力主義、功績主義で人材の登用を図っていく。家柄とか門閥とかそういうものでもって人を判断するのではなくて、あくまでも能力主義、功績主義で人を判断していくというように、人の見方を公正にしていくということにナポレオンは全力をあげるわけであります。

池田先生はかつて話をされたことがあります。「私が今まで、ずっと心に銘記してきたことがある。それは三つある。一つは、自分は偉くならない。人を偉くする」。自分は偉くならない。人を偉くする。どうやって人を偉くするか。自分は絶対に偉くなることを求めないと。それから二番目に「学歴や家柄でもって人を判断することは絶対にしない」。家柄、学歴、社会的地位などで人を差別することは絶対にしない。「皆、人間として平等に大切にしていこうという

ことをずっと心がけてきた」。第三番目には、「第一線で一生懸命健闘している人を最大限大事にしていこう。慢心や要領のある幹部は敢えて厳しくしよう。賞罰を明確にし、公平にして、皆がやる気を奮い起こして、団結していけるようにしよう」。こういうことを心がけてきたと。

自分が偉くなることを求めない。人を偉くしていく。二番目に、学歴や家柄や社会的地位などで人を差別することはしない。人間として平等に大切にしていく。三番目に、第一線で一生懸命健闘している人を最大に大事にしていく。慢心や要領のある幹部には敢えて厳しくする。賞罰を明確にし、公平にして、皆がやる気を奮い起こして団結していけるようにしよう。このことを自分は生涯かけて守ってきた。こう先生は言われました。

ナポレオンは革命によって、革命前の社会的な差別、不平等、そういうものを公平にしたとともに、同時に革命によって起こってしまった混乱、あるいは対立、そういうものを無くすために一生懸命努力する。すなわち「社会的融和と再構成」を一生懸命図ったわけであります。

二番目にナポレオンは「自由と体制の安定のバランス」を図ります。ナポレオンは「自由」「平等」「友愛」というフランス革命の理念を最大限に大事にいたします。そのために絶対王政時代にがんじがらめにされていた封建的な身分制社会に鉄槌を加え、そして、言論出版の自由を与え、そして何よりも研究する、学問をするそういうことに最大の力を注いでいくわけであります。

さきほど紹介いたしましたように、エジプト遠征の際には、何とナポレオンは167人もの学者と、しかも２万５千冊の本をもっていく。これから戦場に行く、戦いに行くというのに167名の科学者を同行させ、２万５千冊の本をもってエジプトに行って、そしてエジプトの研究を徹底的に行う。そして彼は「将軍ボナパルト」というように名乗るよりも「フランス学士院会員ナポレオン」と、「フランス学士院会員」という名称を好んで表に出していく。

そしてナポレオンは世論を非常に大事にいたします。自分がクーデターを起こした時、自分が憲法を定めた時、再び自分が皇帝に就任した時もナポレオンはその都度人民投票にかけます。諸君たちは自分のこのクーデターを承認してくれるか。自分のこの憲法改正を認めてくれるか。自分が皇帝に就任することを承認してくれるか。ナポレオンはその都度、憲法改正、またクーデター、そして皇帝就任、その度国民投票にかけて、そして国民の意見を聞く。国民の賛否を問う。そのように自由と体制のバランスを非常に巧みにナポレオンは図っていくわけであります。

三番目が宗教政策であります。さきほど紹介いたしましたように、絶対王政はカトリックと密接に結びついておりました。国王に従うことが神に従うことになる。国王のために尽くすことが神に貢献することになる。神の救済を得ることになる。非常に密接な関係をもっていたわけであります。フランス革命はそれに対して鉄槌を加えました。「何が国王に従うことが神の救済につながるんだ」「そんなことはあり得ない」。「もし国王が悪い国王ならばその国王を倒しても構わないんだ」。こういう考え方をフランス革命は打ち立てるわけであります。フランス革命はこの宗教を徹底的に否定するというそういう行動をとるわけであります。

ナポレオンはそれに対して高い理想を掲げながらも非常に現実をクールに見ておりました。フランス人民の75%は農民である。その農民たちは敬虔なカトリック教徒である。この農民たちからカトリックを奪ってしまうことはそれは現実的ではない。かえって混乱させてしまっている。宗教は体制の安定にとって重要な役割を担っている。宗教は全ての人をなぐさめる。「宗教なき社会は羅針盤なき船である」。ナポレオンはこのように見ておりました。

そして、カトリックは国教とはしない。しかし「フランス人の大多数の宗教」としてカトリックを認めていく。こういう政策をナポレオンは打ち出します。人々に、宗教を信じてもいいんですよ。カトリックを信じても構わないんですよ。今までどおりやってもいいんですよ。このようにナポレオンは人々に安心感を与えていくわけであります。

そして1801年にローマ教皇ピウス７世と宗教協約を結びます。すなわち、ローマ・カトリックはフランスの国教ではない。国の宗教ではない。でもフランス人の大多数の宗教である。国教とはしないけれどもフランス人の大多数の宗教であるということを認める。その代わりローマ教会はフランス革命後のフランス共和国を承認するという交換条件を出すわけです。カトリックは弾圧はしない。しかし国教とはしない。フランス人の大多数の宗教である。こういう形で認める。その代わりローマ教会は新しくフランスに誕生した革命後のフランス共和国を共和国として承認するという方針を互いに認めさせるわけであります。

そしてナポレオンはカトリック教会をむしろ政府の下においてカトリック教会が再び王党派と結びつくことを断ずるわけです。そして聖職者は政府から給与をもらうような形にする。しかもナポレオンはこの「信教の自由」をカトリックだけに与えたのではなくて全ての宗教に与えるわけです。全ての宗教に自由を与え、プロテスタントを信じても構わない、ユダヤ教を信じてもいい、イス

ラム教に対しでも理解を示すという、こういう宗教政策をとるわけであります。

当時のフランスにおいてユダヤ教を認めるということは考えられなかったわけです。あのキリストを売ったユダ、ユダヤ教のユダです。これはとんでもない問題である。そしてまたカトリックを否定してプロテスタントという新しい宗教を生んでしまう。これを信ずるなんてとんでもない。しかもイスラム教というのは全然宗教の形態が違う。当時はフランスの中にイスラム教徒はいませんでしたけれども、ナポレオンはエジプトや中東に行ったときに、ナポレオン軍の兵士たちにイスラム教、マホメットというものを弾圧してはいけない、彼らの宗教は彼らの宗教として認めていかなければならないということを言うわけであります。

このようにナポレオンはカトリックを認めるばかりでなく、プロテスタント、ユダヤ教、イスラム教、あらゆる宗教に自由というものを与えるのです。宗教の自由を認め、宗教の多様性を容認していくわけであります。これが後の文明間の協調を図っていくというナポレオンの考え方に通じていくことになるわけであります。このようにナポレオンは三番目の政策として宗教政策という非常に重要な大変難しい問題に対して見事な判断を下していったのであります。

第四番目が民法典の編さんであります。すなわち国民が生活するうえで万人がきちっと守らなければならない世俗上の法律、これをナポレオンはきちっと定めたのです。封建時代に民法はありましたけれども、地域地域によってバラバラでありました。ナポレオンはこの民法典によってそれらバラバラの民法を統一して、世俗面での人々の生活の一体化を図ったわけです。しかもナポレオンの民法典はフランス革命の精神である「自由」「平等」「友愛」という理念を具体化したものであるという意味で非常に画期的なものでありました。

1804年３月21日に民法典は公布されます。109回審議が行われまして、これに57回ナポレオン自らが出席し、全2281条から成るという壮大な民法典であります。しかも内容的には個人の自由を保障し、法の下の平等などをきちっと図って、所有権ということを確立し、結婚は教会でなくて民事婚という形でも構わないという形にして、しかも離婚の自由、カトリックは離婚の自由を認めませんでしたけれども、ナポレオンは離婚の自由を認めたのです。

この民法典は世界70カ国にまで広まった。日本にまでこのフランス民法典は大変に大きな影響を与えたわけであります。かつて池田先生と対談したトインビー博士も、フランス民法典が日本にまで影響を及ぼしたということは「ナポレオン法典の普及の歴史に於ける最も注目すべき挿話の一つ」と非常に高く評

価しておりました。

フランス民法典は法律の文章でありますけれども大変な名文でありまして、かの文豪スタンダールがこのフランス民法典を毎日数条ずつ読んでいたという有名な話もあります。だいたい日本の法律は悪文の代表でありまして、文章を読むだけでそれだけでいやになってしまうという性格のものでありますけれども、このフランスのナポレオン民法典は大変な名文である。このフランス民法典、後にナポレオン法典と呼ばれるようになりましたけれども、このナポレオン法典によって革命の原理の輸出がヨーロッパへ世界へと広まっていったと言われております。

ナポレオンの数々ある業績のなかでもさきほど午前中に述べました宗教協約、すなわちローマ教会と取り交わしたフランス共和国の承認とカトリックをフランス人の大多数の宗教と認めるというこの宗教政策によって人々に精神的な安定を与え、フランス民法典によって人々の世俗上の一つの統一原理を与えるという、このナポレオンの２大成果と言われるのがこのナポレオンの民法典の編さんと宗教協約、こういうように言われております。

五番目にナポレオンの業績として､｢行政･官僚機構の整備」をあげられます。社会の安定を図って政治制度を強化した。そしてフランスが単一で不可分の共和国であることを支えたのがこの「行政・官僚機構の整備」でありました。

フランス皇帝を中心として各県知事、これがフランス皇帝の任命により小型の皇帝といわれるように、いわゆる中央集権的なフランスの行政体制がきちっと確立をしたわけであります。しかもナポレオンは警察機構を整備いたしまして治安の維持にあたりました。このようにナポレオンは「近代官僚制国家の生みの親」と言われるほどフランスの行政機構をきちんと整備したのです。

ナポレオンの時代ほど行政が強固でしかも仕事に熱心な時代はなかった、こう高く評価されるほどナポレオンの行政官僚機構の整備というものは見事な形をとったのです。

六番目は教育制度であります。絶対王政の時代は教育権は教会が握っておりました。教会がキリスト教の理念に基づいてキリスト教をきちっと教えるために教育権を握っておりました。ナポレオンはその教会の教育権を取り上げて、キリスト教教育に代わる新たな近代的な公共教育を行ったのです。すなわち教育の理念を「自由」「平等」「友愛」「人権」という理念におき、これをどう教育によって教えるかということに最大の力を入れたのであります。教育権を教会から取り上げて、そして国家の形成に忠誠を尽くす人材を育成するという形

態をとったのです。すなわち宗教教育から「自由」「平等」「友愛」「人権」に基づいた教育理念、これを教えるという形態をとりました。

ナポレオンは第一執政の３年間に4500の小学校、750の中学校、45の高等中学校を作りました。特に中等教育とエリート教育にナポレオンは非常に力を入れたと言われております。1808年には帝国大学を組織化いたしまして、全てを統一化するという教育制度の確立を図っていったのです。

ただしナポレオンは女子教育については、これはコルシカ島出身というその土地柄もありまして、いわゆる良妻賢母型の女性を育成するという教育方針で、女性が知的に高度な教育を受けるということについてはナポレオンは関心はなかったようであります。とにかくエリート教育、そして中等教育にナポレオンは大変に大きな力を入れたのです。

しかも彼が一貫して誇りとしていた学士院会員、そして国立図書館の充実、国立公文書館の刷新というようなそういう知的な制度の整備もナポレオンはきちっとやったのです。公共教育の制度、これを確立したというところにナポレオンに非常に大きな業績があります。

七番目に、経済的な発展のために手を打ちます。彼は財政の立て直し、これに全力を尽くす。1800年にはフランス銀行を創設して通貨の安定を図ります。通貨の安定こそが財政制度の安定の一番の基盤であるという考え方を彼はもっていたわけであります。

また税制をきちっと整備するために、税制を確立いたします。直接税と間接税をきちっと分けて、そして間接税にはビール、ワイン、タバコ、塩、そういう物に間接税をきちっとかけるわけです。

さらに産業の発展、これにも力を注ぎます。新規事業には助成金を出す。また税金の還付を行うという制度もとります。新規事業への助成金ですが、特に新しい発明には賞を出します。その結果、鉛筆、今私たちが使っている鉛筆、それから缶詰めとか瓶詰め、こういうものはすべてナポレオン関係者が発明したものであります。

鉛筆、それまではすべて羽のペンでした。これですと戦場で雨の中ではものを書くことができない。そういうなかで鉛筆を発明させ、そしてその鉛筆によって自由に、いつどこでも字が書けるという、そういう形をとったわけであります。

そしてナポレオンは農業の発展に力を入れます。「帝国第一の基礎は農業である」。そして農業の次に工業、その次が商業であると。こういうようにナポ

レオンは順番を農業、工業、商業という形で位置づけを図ったのです。もちろん、工業、商業がどうでもいいというわけではありません。農業が基本である。そのうえに工業、商業があるという、こういう順位をつけたのです。

そして商業の発展のためには道路の補修、拡張、これを図ります。道路を整備してフランス国中に商業製品が行き渡る様なそういう政治を図りました。

ナポレオンはさらに完全雇用を達成いたします。フランスの産業はナポレオンの時代に25%の成長を図ったという、画期的な記録が残されております。ナポレオンの時代は、数年間を除いて、ほぼ完全雇用であったと、言われております。25％の成長、完全雇用という画期的な業績を残したのです。

彼自身、「フランスの産業を創造したのは私である」、こう胸を張って豪語するほど、商業、工業、農業の発展、および完全雇用の実現に全力をあげたのです。

ナポレオンの八番目の業績、それは、公共事業の推進であります。彼は、道路、橋、港湾、運河、治水、下水、の整備を図る。さらには病院や監獄の改善まで図っております。道路や橋、港湾、運河、治水、下水、こういったことの整備をしっかりと図る。しかも病院や監獄の改善まで図っている。こういう公共事業を推進いたします。

なかんずく都市の整備、都市の美化に全力をあげまして、パリには記念碑を建て、建造物を作ります。かの有名な凱旋門を作りはじめ、そしてヴァンドーム広場の戦勝記念柱を建てます。そしてナポレオンは「パリを世界一美しい都市にするんだ」「パリを世界の中心にしてみせる」「文明の首都はパリである」、こういうようにナポレオンは言って公共事業の推進に全力をあげたのです。

「ナポレオンのこの14年間の公共事業は18世紀100年の公共事業に匹敵する」といわれるように、18世紀に100年かかって行った公共事業よりも、ナポレオンの14年間の公共事業の方がはるかに発展していた、こう言われるくらいに、見事な公共事業の推進を図っていたのです。

さらに彼はフランスの工業の保護・育成に全力をあげます。これは機械や技術に注目して導入されます。その結果、綿花工場、製紙工場、織物工場、こういうものがきちっと整備され、なんと数百万人が雇用されたといわれております。このようにフランスの工業の保護・育成に彼は全力をあげたのです。

こうしたナポレオンの数々の手の打ち方によって世の中が安定してまいりますと、次に上流社会が出現し、それに伴って様々な奢侈品が登場してまいります。陶器、金銀の寄木細工などの室内装飾品、また宝石類の製造、家具の発明

というような形であらわれます。家具は「アンピール・シュテル」といういわゆる『帝政様式』という形でもって家具が生まれるのです。

さらに彼は、さきほど申しましたように、人材の登用に全力をあげます。過去を問わず、出生を問わず、彼は人材の育成に力をそそぐのです。「人材に道を開け」、ナポレオンの遺命であります。とにかく人材ですべてが決まる。人材の登用に全力をあげようというのが彼の信条でありました。

そしてナポレオンの文人たる最高の証拠は美術館の建設であります。彼はパリのルーブル美術館、リヨン市、リール市、またマルセイユ市、国内の15ヵ所に美術館を建設するのです。ナポレオンの時代にフランスの美術館は整備されたといわれるくらいに見事な整備が図られていったわけであります。

以上、ナポレオンの業績について簡単に申しましたけれども、このように、いわゆる社会の融和と再構成から始まって美術館の建設にいたるまで実に膨大な数の業績をナポレオンはそのわずか十数年の間にあげているのであります。これをみてもナポレオンが単なる軍人ではなかったということがお分かりいただけるかと思うのです。

ではこうしたなかで、ナポレオンは一体将来に向けてどういう夢をもっていたのか。ナポレオンの夢という点について考えてみたいと思います。

第一番目は、なんといっても、フランス革命の原理を受け継いでフランスの社会を安定・発展させることが第一番目の彼の夢でありました。フランスの安定と発展を目指す、新しい革命の原理に則った新しい社会を作るというのがナポレオンの第一番目の夢でありました。

ナポレオンの第二番目の夢はフランスの社会を安定させたうえで、こんどはヨーロッパを統一する、ヨーロッパの統一ということが彼の夢でありました。ナポレオンは、「ヨーロッパには同一の法典、同一の法廷、同一の通貨、同一の度量衡が必要である。私はヨーロッパ人を同一の人民にしたい」。こうナポレオンはかねがね言っておりました。

彼は述べております。「私は確信いたしますが、必ずやいつの日にか西洋帝国が再び生まれ来るのを私は信じております」と述べて、「西洋帝国」といってヨーロッパが一つの国家になることを彼は夢見ていたのです。

彼はまた次のように言っております。「私は国内の諸々の党派を融和させていたのと同様にヨーロッパの諸国の大きな利害の融和を準備しようと思う」。これを私の理想と考えるというようにナポレオンは言っていたのです。

このようにヨーロッパは今日、ナポレオンの時代、これを夢見たように、27

カ国の欧州連合ができているのです。ナポレオンのヨーロッパ統一の夢は最終的には叶いませんでしたけれども、しかし、今日、ほぼナポレオンの理想どおりのヨーロッパの統一ができております。

三番目に、ナポレオンはヨーロッパの統一の次に東西文明の融合ということを考えていたのです。ナポレオンは言います。「このちっぽけなヨーロッパでは大した栄光は期待できない。オリエントへ行かなければならない。オリエントこそあらゆる偉大な栄光の源泉である」。ナポレオンはこう言っていたのです。すなわち東西文明の融合を図っていくことが彼の夢であったのです。

ナポレオンは、「エジプト遠征の主要な目的はオリエントの局面を全面的に変えて、インドへの新しい道を開くことにある」、こう言って、オリエントからインドへ続く道を切り拓いていくことが彼の夢であったということを言っているのです。ナポレオンの部下は次のように述べております。「皇帝は特にアジアに注意を向けられていた。ロシアの政治状況やロシアがインドや中国にまで企てることの全てについて皇帝は考えていた」と。このようにナポレオンの部下は後に記述しているのです。東西文明の融合を図るということはナポレオンの大きな夢であったのです。

四番目にナポレオンの夢は、人類を結合させ新しい共和の時代を開く、すなわち人と人とのつながりに基づいた世界合衆国こそナポレオンの夢、理想であったと言えるのです。

こう考えてみるとナポレオンの夢というのは、一つは「フランスの安定・発展」。二つ目には「ヨーロッパの統一」。三番目には「東西両文明の融合」。そして四番目には「世界合衆国の建設」と。こういう４つのナポレオンの大きな夢があったということがわかると思います。

昔、学園生が池田先生に「池田先生の夢は何ですか」と訊いたところ、先生は「それは師匠の夢を実現することです」と答えられた。「戸田先生の夢を実現することが私の夢です」というふうに池田先生は答えられましたのです。戸田先生の夢である広宣流布という夢の実現に向かって池田先生は全力を注がれたのです。

中ソ対立の激しい時代に先生は中国に行かれ、そしてソ連に行かれ、そして中ソの和解を図られたのです。また中国とアメリカとの対立に対しても、先生はアメリカに行かれてキッシンジャーと対談をし、そしてキューバとの仲裁を先生は提言されるなど、世界の対立の激しいなかにあって民族の融和、世界の調和というものを図るために先生は全力をあげられていったのです。

では次に、ナポレオンはなぜ強かったのでしょうか。ナポレオンが強かった理由をみていきたいと思います。

第一番が、「フランス語に不可能という字はない」というナポレオンの絶対の確信があったのです。フランス語には不可能という文字はないんだと。

また「一点突破こそ全面展開の鍵である」と。すなわち、一つの急所、その一点を突くことが物事を成就するための一つの重要な柱となると。

物事にはかならず急所がある。物事を達成するための一つのポイントがあるんだと。例えば会合であれば司会である。先生は「会合であれば司会である」と、「通訳であれば声である」と。司会とか声とかそうした重要なポイントがあるんだと。そこをしっかり突いていくことが大事だよと先生はよく教えてくださいます。

ナポレオンもこの一点突破こそが全面展開の鍵であると言っております。弱点を見つけて、弱点を作り出して、そしてそこを徹底的に突いていったと。

そしてまた「細心の配慮こそ最大の武器」であると。ナポレオンは一つ一つの事にあたって細心の配慮を図っていったのです。何事も小さなことに最大の配慮を図っていくことが非常に重要だと思うんです。

ナポレオンは部下の問題、兵士の問題について細心の配慮を図っていったのです。

四番目に「逆境こそ最大の飛躍のバネ」であったと、言えると思います。これは次にお話する「ナポレオンから学びうるものは何か」という部分にも通じるんですけれども、ナポレオンから学びうる最大のものは「コンプレックスこそ飛躍のバネ」であるということであります。

ナポレオンが強かった理由として「馬術を駆使した点」、「言葉を使い切った点」、「統率力」、この「馬術」「言葉」「統率力」という３つをあげることをできるんですけれども、この３つはいずれもナポレオンのコンプレックスから出たものであります。

すなわち、ナポレオンのコンプレックスの第一番目は背が低かったこと。彼は背が低かったために意識的に馬に乗るように努めました。それで乗馬術を磨くことができた。部下が証言するには、「皇帝は室内にいる時以外は常に馬の上にいる」と言われるくらいナポレオンは乗馬を徹底的に訓練したわけであります。そして彼は一人、先頭に立った。戦闘の時もですね、馬に乗って事前に偵察をして、敵状や地形を確認する。常に馬に乗って地勢を確認していたわけです。イギリスの将軍ウェリントンは「ナポレオンが戦場に姿を現すと４万人

の兵士に値する戦力となる」、こう言ったくらいにナポレオンが馬上に乗って現れると４万人の兵士が現れたような、そういういわゆる威厳というものがあったと言っているのです。

またナポレオンは、前にもお話しいたしましたように、コルシカ島の出身であります。ナポレオンが生まれました前年にフランス領となったわけでありますから、ナポレオンはイタリアのなかにいてフランス語を話すというように、フランス語が非常に苦手であった。そのために彼は徹底的に読書、作文に力を入れるのです。ブリエンヌの幼年学校に入ってからも時間があれば図書館に入って徹底的にフランス語を学んだ。文学も読んだ。文章を読破した。そういうところからナポレオンはいつの間にかフランス人以上にフランス語が上手くなったと言われるのです。

辺境の地コルシカ島の出身でありました。コルシカ島というところは大変に集団主義の強いところでありまして、大家族主義、集団主義が強くて、統率力を養うには非常に適していた。集団主義、家族主義のうえからいってナポレオンは統率力、人々をまとめる力、そういうものを身につけることができたのです。

コルシカ島の貧しい、金銭面、人脈面に恵まれないところの出身でありましたが、ナポレオンはもし特定の貴族や家柄に属していたり、特定の政治勢力と結びついていたならば、あるいは革命の派閥の攻防戦のなかに巻き込まれてしまって、失脚してしまったかもしれない。ところがナポレオンにはそういう人脈とか派閥面のつながりがなかったために、逆に攻防戦に巻き込まれることはなかった。そういう点が非常に恵まれていたのです。

平素ナポレオンは無口な非常に目立たない少年でしたけれども、一たび棒倒しとか騎馬戦、あるいは雪合戦、あるいは大嵐、火災、そういうものに直面すると、ものすごい力を発揮したと言われております。

彼はコルシカ島というフランスから離れたところに生まれ育ったがために、フランス人をある意味では客観的に見ることができたわけです。ナポレオンが言うには、「フランス人は自由と平等とは言ったけれども、フランス革命の理念が全然わかっていない」。フランス人をとらえるにはもっとも虚栄心に訴えることが一番いいと。レジオン・ド・ヌール勲章を作った狙い、また帝政貴族を導入したりと、このことは一見、革命の理念に反することでありますけれども、しかしその差別の観念がフランス人の虚栄心に訴える、フランス人を統合していくという意味で非常に大きな力となったのです。

ナポレオンは、「フランス人は軽佻浮薄で虚栄心が強く、実質は何も知らな

いくせに口先だけが非常に上手い」というように見ていたのです。コルシカ島の出身であるだけにナポレオンはフランス人を冷静に客観的に見ることができたという利点に変わっていったのです。

このようにナポレオンから学びうる第一番目のものは「コンプレックスこそが飛躍のバネ」になるということ。背が低かったこと、そしてまたフランス語が話せなかったこと、また辺境の地コルシカの出身であったということ、こういう点がナポレオンがその力を発揮するうえにおいて非常に大きな逆の力となって発展をしていった、こう言えると思うのです。

ナポレオンから学ぶ第二点目は、「壮大なビジョンを保ち続けることこそ人間の証である」ということです。

人間にとって重要なことは「壮大なビジョン」、これを保ち続けること、これが大事であります。すなわちナポレオンはフランスを安定させ、ヨーロッパを統一し、東西両文明を融合させ、世界帝国を作っていくという壮大なビジョンを保ち続けたのです。セント・ヘレナ島に流されてからもナポレオンのこのビジョンは消えることがなかったと言われております。人間として大事なことは「夢」を持ち続けること、だと思うんです。

それからナポレオンから学びうるものは「行動や実践のないところからは何も生まれない」ということであります。ナポレオンのとにかく凄いところは行動力、実践力であります。さきほど述べてきたような数々の業績、ああいうものからもわかるように、行動力や実践力、それがないところからは何も生まれないというのがナポレオンを物語る非常に重要な教訓ではないかと思うのです。

とにかくナポレオンの偉業というものはこれが一人の人間が一生のうちに行ったのかと思わせるほどの見事なものであるわけであります。しかし考えてみれば、一人の人間がすべてできるというものはないわけです。すなわちナポレオンの下には有能な大臣、部下、議員に恵まれていた。そういう人たちがたくさんいた。そういう人を糾合していった。すなわちナポレオンは人々のやる気を出させていったという、ここに私はナポレオンの凄いところがあると思うのです。

すなわちナポレオンの凄いところは統率力であり、スタッフの能力を最大限に引き出すところにあるわけであります。個人主義のフランス人をまとめて、そして各人のやる気、能力を引き出しながら皆をまとめていくナポレオンの求心力というものは、私は非常に凄いものがあると思うわけであります。実に「行動や実践のないところからは何も生まれない」というナポレオンから学びうる

ものは非常に重要なものであると思うのです。

それでは次に、「ナポレオンが現代に示唆するもの」は一体なんでしょうか。

私たちはナポレオンから何を学ばなければならないのか、と言いますと、一つは「新しい時代、新世紀を開くのは我らであるとの気概をもつこと」。新しい時代、新世紀を開くのは我々である、という壮大な気概をもつことが私は大事だと思います。

二番目には「一人の人間には無限の可能性があるとの確信に立つこと」。これも先ほど述べたとおりでありますけれども、一人のどんな人間にも無限の可能性があるという確信に立つことが大事だと思います。

三番目に「恩師の思いを我が胸中に輝かせて生涯前進するということ」。池田先生も戸田先生の思いを胸中に輝かせて生涯前進されておられます。私たちも、大事なことは、「ナポレオンが好きだ」、「ナポレオン博士」、「ナポレオン」、と言われてきたこの二代の会長のナポレオンに対する思いというものを胸中に輝かせて生涯前進していくぞということ、これが大事ではないかと思うのです。

さてそれでは次に「ナポレオンの弱点」というのはどういう点にあったのでしょうか。これは第一番目に「傲慢になっていった」こと。これはナポレオンが一番注意していた点なんですけれども、人間というのはどうしても一つの物事を達成したり、長く生きてくると、自分自身の生き方に対して傲慢になってしまう。そういう点があると思うんです。

ナポレオンも年とともに傲慢になっていって部下の言うことを聞かなくなっていった。そういう弱点があったと思います。

二番目にナポレオンは「部下から裏切られていった」こと。タレーランとかフーシェというような有能な部下がいたのですけれども、そういう部下がナポレオンを裏切っていった。コルシカ人は自らが裏切るとか反逆するということはないんですけれども、ナポレオンの弱点はそういう裏切っていく部下を使ってしまうという、そういう人の良さがあった。部下から裏切られていったという点が一番のナポレオンの弱点であったと思います。

三点目に「戦術を学ばれていった」こと。ナポレオンの初期の頃の「一点突破、全面展開」という、一つの点を突破していくというそのやり方が敵の軍隊から学ばれていってしまう。そしてその戦術をナポレオンは変えようとしなかったというところに問題があったと言われております。ナポレオンの初期の成功していった戦術を学ばれていった。こういう三つの点がナポレオンの弱点だと思います。

そして「現代に伝えたいナポレオンのメッセージ」であります。その一番のメッセージは何かというと「民衆こそ時代の主役である」こと。絶対王政を倒してフランス革命を起こした。これからは民衆の時代であるといわれる。民衆こそが時代の主役である。この点にナポレオンが注目をしていたという点であります。

それから、今は戦争が絶えないけれどもこれからは「平和、知性、産業が要になる」と、このことをナポレオンは訴えていたわけであります。これからは平和である。それから知性が大事だ。人間が一番克服しなければならない問題は知性である。「無知」「野蛮」というものを克服していくことが一番重要な点であるというふうに述べたのです。

知性というものはこれから重要になってくる。そして産業、これが要になる。

そしてさらにナポレオンは「文化の時代」だと。文化が大事になると。そういうことを述べたのです。

なおナポレオンは、さきほどちょっと言い忘れましたけれども、「細心の配慮こそ最大の武器」だと言いましたけれども、「細心の配慮」、常に人の知らないところで一生懸命ナポレオンは努力をしていたわけですね。

自分の寝室に連隊の図と連隊長の名前を書いて、そしてナポレオンはその連隊長の名前を覚えていた。そして実際の戦闘になると、「〇〇連隊長、前へ！」と言うわけですね。そうするとナポレオン将軍から名前を呼ばれた連隊長は「おお、ナポレオン将軍が私の名前を知ってくれている」ということで、いやがうえにも士気が盛り上がるわけであります。そして見事に力を発揮していったという例があります。

それを「おい、そこ若いの、前へ行け」とかね、「おまえ、前へ進むんだ」とかね、そんなことを言われたんでは力が出ない。やはり「〇〇連隊長、前へ」というように名前を呼ばれることによってその連隊長の力が何十倍にも出たと言われております。

このように人知れず努力することによって、細心の注意を払うことによって最大の力を発揮させていったといわれております。

では「いくつかのエピソード」ということで最後になりますけれどもお話ししたいと思います。

ナポレオンの有名な言葉に「中国が動く時、世界は変わる」という言葉があります。

ナポレオンが流されていたセント・ヘレナ島というのは、大西洋上の絶海の

孤島でありまして、今でこそ飛行機がありますから飛行機でどこにでも行くことができますけれども、当時、船で行くときは、アフリカ大陸、並びに中南米の大陸を結ぶ場合にセント・ヘレナ島は交通の要所だったわけです。

非常に不便なところでありますけれども交通の要所であった。船が盛んに行き来していた。東洋に行く船、南北のアメリカに行く船等が盛んに行き来していたのです。そういうところからナポレオンは様々なことを学んでいたわけでありますけれども、中国の話、アジアの話、これに対してはナポレオンは大変な関心をもっていたのです。

そうしたなかからナポレオンの言葉として「中国が動く時に、世界は変わる」。これからは中国の時代になるということをナポレオンはすでに19世紀のときにみていたのです。

中国は今、世界の大国としてどんどんどんどん発展をしていっている。そしてアフリカに、北欧に、オーストラリアに、あらゆるところに経済援助等々をして発展を続けているわけでありますけれども、この中国の動向というものは世界の動向を考えるときに切り離せない関係にあるという非常に重要な段階に今入っております。

先生は中国をはじめアメリカにつきまして、「これからは」と言われ、「これからはアメリカと中国の時代だ。英語と中国語をしっかり勉強するんだよ」と。入学式、卒業式で必ず先生が言われることは、とにかく「外国語をしっかり勉強すること」。「なかんずく、英語と中国語をしっかり勉強するんだ」と。「英語をしっかり勉強するんだ」。これが先生の遺言になっていると言っても過言ではないのです。

一昨年の入学式のときに先生は入ってこられてスピーチをされる段階になって箴言を述べられたんです。それを英語と中国語で先生は話されました。そして英語の先生、中国語の先生に、「意味、わかりますか」「話、通じますか」「私の中国語、大丈夫ですか」「英語、大丈夫ですか」というように先生は何回も確認されたんです。後で聞いてみたらば、先生は英語と中国語は大事だということ、これからは語学の時代だということを単に学生に言うだけではなくて自らが先陣を切って学ばれた。数日前からその箴言を何回も何回も練習されて、そして当日に臨まれたと聞きました。

ナポレオンもセント・ヘレナ島にいるときに「英語を学ばなかったことが私の一つの悔いだ」と言って、セント・ヘレナ島で一生懸命、ラス・カーズという書記兼通訳から英語を勉強するわけです。これからは英語の時代だと。

ナポレオンが生きた19世紀の時でさえもすでに英語の時代だといわれている。まして今の時代は英語を勉強する、中国語を勉強する、これは非常に重要な段階に入っているわけであります。ナポレオンは「中国が動く時には、世界は変わる」と。まさに今、世界が変わりつつあるというそういう段階に入っていると思います。

それから「沖縄には武器がない」、こういう話を聞いてナポレオンはびっくりするのです。

1817年の８月、イギリスのバジル・ホールという艦長がセント・ヘレナ島にやってきます。アジアからの帰り、ナポレオンに是非会いたいと来たわけです。

ところがナポレオンは「会わない」と言います。するとバジル・ホールは侍従長のミュラーという人に「私はブリエンヌ幼年学校のことについて皇帝にお尋ねしたい」と。「私の父、サー・ジェームズ・ホールはナポレオン閣下がブリエンヌの幼年学校にいたときその学校にいたイギリス人です」と伝えたのです。そのことを聞いたナポレオンは態度が一変します。

ブリエンヌのことをナポレオンは生涯、忘れなかった。ブリエンヌのことについて関心をもっておりました。このサー・ジェームズ・ホールという人はナポレオンが初めて見たイギリス人だったんです。ナポレオンは「会う。バジル・ホールに会う」と言って、翌日の午後２時にナポレオンが会うと言ってきたのです。

その場面をちょっと紹介いたします。ナポレオンに会ったときのバジル・ホールの手記でありますけれども、「部屋に入るとナポレオンは媛炉の前に立って自分の手で頭を支えて肘を暖炉の柵にかけていた。『そなたの名前は』と聞かれた。私が、バジル・ホールです、と答えると皇帝はこう申された。『ああ、ホール、ホールとな。私はブリエンヌの幼年学校にいた時、そなたの父を知っている。私はよくそなたの父を知っているぞ。そなたの父は私が会った最初のイギリス人であった。そのことについて私の生涯の全てを通じて思い起こしている。そなたの父は今何か公職についているのか。……』」。このように会話が続いていく。

この後は省略いたしますけれども、ナポレオンの生涯の最後において幼少の頃に過ごしたブリエンヌの幼年学校のことについては忘れない。あの幼年学校にいたときに最初に会ったイギリス人がこのバジル・ホールのお父さんだった。こういうことでその一言を聞いただけでナポレオンは「会う」と言ったのです。この幼年学校のことを忘れない。これは非常に重要な点だと思いますね。

昔、大学の教員が池田先生と懇談させていただいた時に、先生が「本当に優秀な学生というのはどういう学生かな」というふうに訊かれたんですね。するともう教員の悪い癖で「はい、勉強のできる学生です」とか「はい、勉強とスポーツのできる学生です」とか「文武両道の学生です」とかいろいろと答えたわけです。

先生は一つ一つ「う～ん、それも重要だな」「それも大事だな」というふうに言われながらも、「本当に優秀な学生というのは生涯母校のことを忘れない学生のことだよ」と言われました。生涯、母校のことを大切に思い、大事にしている学生がそれこそ本当に重要な、優秀な学生なんだと。このように先生が言われたことがあるんです。私たちは本当に新たな視点に驚いたわけでありますけれども。ナポレオンも生涯、このブリエンヌの幼年学校のことについては忘れなかった。そういう思いがあるわけであります。

そこで沖縄のことが問題になったんです。ナポレオンは東洋の問題に関心をもっていた。バジル・ホールは琉球、中国、その近隣諸国の話をすると、琉球の話についてはナポレオンは未だかつて聞いたことがないというふうに大変に興味を示した。

「琉球の人々が武器をもっていないということを聞かれたときにナポレオンは大変に驚いた。『武器が一つもないって。つまり大砲もない。彼らは小銃すら持っていないのか』。マスケット銃さえないのです、と私は答えた。『槍もないのか。弓も矢もないのか』。私はナポレオンに、どれもこれもございません、と答えた。『弾頭もないのか』とますます声を高くしてナポレオンは叫んだ。いいえ、ありません、と。『しかしだ。武器がなくて一体どうやって戦うんだ』。私は、私たちが発見しうる限りにおいて琉球の人々は戦争をしたことがない、と回答した。『戦争がない。そんなことが考えられるのか』とナポレオンは軽蔑するような、また信用できないような表情をして叫んだ。そして『この太陽のもとで戦争を知らない人間がいようとは』」というふうにナポレオンは驚くのです。

このように琉球には武器がない。戦争すらない、ということを聞いてナポレオンは大変に驚くのです。

そしてナポレオンの一つのエピソードとして「最後の閲兵」ということをご紹介したいと思います。

1814年、ナポレオンが４月に皇帝を退位しますがその１月に最後の閲兵をいたします。すなわち兵士一人一人に挨拶していくわけです。ナポレオンはズラッ

と居並ぶ兵士の前を一人一人の顔を見ながら前進をしていく。

ある老兵の前に来たときナポレオンの足がピタリと止まる。

「どこかで見たことがあるな。そちの名前は何というか」

「ノエルです」

「確かパリの出身だったな」

「はい、パリの出身です」

「私とイタリアへ行かなかったか」

「はい、参りました。1796年、アルコレ橋の戦いです」

20年近くナポレオンとノエルは生死をともにしてきたわけです。

「確か、ノエルと言ったな」

「はい、ノエルであります」

「いつ伍長になったか」

とナポレオンは聞くのです。

「はい、1800年、マレンゴの戦いです」

「近衛兵に志願しなかったのか」

「それこそ私の願いでした。1805年、アウステルリッツの戦い、1809年、ヴァグラムの戦い、すべての戦いに参加いたしました」

ナポレオンはなぜ20年もの間いっしょに共に戦ってきたノエルがいつまでも伍長という兵隊としては最下級の役職に止まっていたのか、側近の者を呼んで理由を聞きます。すると側近の人が、ノエルという人は大変に地味な人であって自己主張をしなかった、また戦争に次ぐ戦争であって人事管理がうまくいかなかった、こういったことについて答えました。ナポレオンは、わかった、というような表情をいたしまして、そしてノエルを隊列に戻しました。そして5分ほどナポレオンは側近と打合せをする。

すると突然、ババババババババッ・・・とドラムが鳴るわけですね。軍楽隊のドラムが鳴り響く。

「ナポレオン閣下の名において、ノエル伍長を陸軍少尉に任ずる」

こう告げるのです。ノエルはびっくりして足を震わせながらナポレオンの前に出てきます。

ナポレオンは「ノエルよ。おまえは陸軍少尉がふさわしい」と言って陸軍少尉のバッジをつけてあげるのです。ノエルは感動してまた自分の隊列に戻ります。

そうするとまたドラムがババババババババッーと鳴りまして、「ナポレオン閣下の名において、ノエル少尉を陸軍中尉に任ずる」と言うのです。ノエル

はもうびっくりして、足もブルブル震えながらナポレオンの前に出てきます。

するとナポレオンは「ノエルよ。おまえは陸軍中尉がふさわしい」と言って陸軍中尉のバッチをつけるのです。ノエルはもう立っていられないほど感動して、自分の隊列に戻る。

するとまたドラムがバババババババババッーと鳴り響く。「ナポレオン閣下の名において、ノエル中尉を陸軍大尉に任ずる」。ノエルはもうブルブル震えながらナポレオンの前に出てくる。

するとナポレオンは「ノエルよ。おまえは陸軍大尉がふさわしい」と言って陸軍大尉のバッチをつけるのです。

そうするとノエルは涙ながらに「ナポレオン閣下。私は一度も役職とか位とか名誉とか地位とか、そういうものを欲しいと思ったことはありません。私のただ一つの喜びは、この20年間ナポレオン閣下と共に戦えたことです。ナポレオン閣下と共に歴史を作れたことです。それが私の唯一の誇りであり、私の唯一の喜びでありました」、というふうにナポレオンに語るのです。

ナポレオンは「うん。そうか」と頷いて、そして自らがしていたレジオン・ド・ヌール勲章という最高の勲章をはずしてノエルにつけてあげるのです。

そして「ノエルよ、さらばじゃ。達者でな」と言って、また閲兵を続けるのです。その去りゆくナポレオンの後姿を見てノエルはもう立っていることができずにワナワナワナと崩れてしゃがみこんでしまう。

これが「ナポレオン最後の閲兵」という場面であります。本当に感動的な情景でありましたけれども、ナポレオンの最後の、ノエルに対する最高の栄誉を称えた局面であったと思います。

そして先生とシャルル・ナポレオン公との最後の対談で感動的な場面がありました。それはですね、先生がシャルル・ナポレオン公に次のように訊かれます。「ここで子孫であられるナポレオン公にうかがいたいのですが、もしナポレオンが200年後の現在に出現したとすれば、いったい、どのような活躍をすると思われますか」というように先生は訊かれます。シャルル・ナポレオン公に尋ねられたのです。

するとナポレオン公は「それは３点あると思います。ひとつは法制度の確立、社会機構の改革、各種産業の発展、文化・芸術の振興など、平和の前進のための行動に向けられたことでしょう」。これが第一番目。

そして第二番目は、「国連事務総長のような役割を担って、世界市民の要望に応え、地球社会の建設に力を注いでいると思います」と。そして「貧困の撲

滅、諸民族の権利の擁護、地域紛争の解決、地球レベルの有益な機関の設置、世界交易の公平な促進、全世界における文化の保護、環境や資源問題の解決などを目指していると思います」。国連の事務総長のような役割を果たしていると思いますと。そして、シャルル・ナポレオン公は第三番目に、「さらに女性や子どもたち、また貧しい庶民など、弱い立場にある人々を守るための戦いを行っているでしょう。そして人権という原則に則って、新しい世界的な組織を実現しようと、前進している姿を思い浮かべることができると思います」と言われております。こういうようにナポレオン公は答えるのです。

この３点がもしナポレオンが現在生きていればやっていることです。一つは国内諸制度の整備、二番目は世界的な貧困の撲滅とか民族間の対立の解決、三番目には女性や子ども、また貧しい庶民を守る、そういう戦い。こういうことをやっていると思いますとシャルル・ナポレオン公は答えられます。

そして最後に言った言葉、これが感動的でした。どういうことを言ったかというと、「こう考えてみると、まさに『21世紀のナポレオン』は、池田SGI会長の姿に重なります。いえ、池田会長こそ『21世紀のナポレオン』なのです」、こういうふうに言われたんです。

これには私も聞いていまして感動いたしました。21世紀のナポレオンはシャルル・ナポレオン公のことだと思っていたわけです。シャルル・ナポレオン公こそがナポレオン家の直系としてナポレオン家を継ぐ者としていると思っていたわけでありますけれども、このシャルル・ナポレオン公が言われたことは、今ナポレオンが生きていれば３のつことを手がけた、考えてみればこの３つのことは池田先生が今やられていることである、「21世紀のナポレオンというのは実は池田先生なのだ」と、「池田先生こそ21世紀のナポレオンなのであります」、こういうふうに訴えられていたわけであります。私は本当に感動いたしました。

今回は、短時間で述べてまいりましたけれども、このようにナポレオンがやってきたこと、ナポレオンの業績、そういうものを見てまいりました。やや難しい点もあったと思いますけれども、どうかナポレオンの業績を受け継いで、今やっているのは池田先生であるということを、シャルル・ナポレオン公が言っていることを思い浮かべて、私たちも頑張っていきたいと思います。

※本稿は、2012年８月25日、第39回創価大学夏季大学講座の際、池田記念講堂で話したものをまとめたものである。